

巨勢山の つらつら椿 つらつらに

見つつ思はな 巨勢の春野を

坂門人足(巻一・五四)

音を繰り返すことで、はすむような調子が生まれています。

『続日本紀』によれば、このときの行幸は9月に出發し10月に帰京しています。歌が詠

今日3月6日はオペラ「椿姫」が1853年に初演された日です。ヒロインゆかりの椿は日本原産の植物であり、欧州に紹介されたのは17世紀のことだったといわれます。一方、752(天平勝宝4)年に始まったという東大寺のお水取り(修二会)では、開山の椿を模した造花の

椿が二月堂の十一面観音に捧げられることで知られます。そのことにちなみ、県内ではこの時期限定で椿をモチーフにしたお菓子などもお目見えし、舌と目を楽しませてくれます。

この歌の題詞には、701(大宝元)年9月に持統太上天皇が紀伊国に行幸した時に詠

まれた歌だと記されています。作者である坂門人足は他に歌や記事がなく、生没年や経歴はまったくわかりません。

『万葉集』には、或本の歌として「川の上の つらつら椿 つらつらに 見れども飽かず 巨勢の春野は(春日老 巻一・五六)も載っています。2首の

やまと
万葉がたり

歌に詠まれた「巨勢」とは、巨勢寺塔跡も残る、現在の御所市古瀬の一带を指します。当時の都は藤原京(橿原市)であり、紀伊国(和歌山県)へ行くにはこの地を通る必要があります。第3句の「つらつらは、つくつく」としみじみと、という意味です。同じく

(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか)

【訳】巨勢山のつらつら椿を、つらつらと——つくつく見ながら思ぼうではないか。巨勢の春の野を。

春花の うつろふまでに 相見ねば

月日数みつつ 妹待つらむそ 大伴家持(巻十七・三九八二)

この歌は、「恋の緒を述べたる歌一首并せて短歌」と題された長歌一首と短歌4首で一組となる作品の第4短歌で、大伴家持が747(天平19)年3月20日の夜に、ふと思いついて詠んだ歌だと記されています。家持は当時、現在の富山県高岡市にあった越中国府に、国守とし

て赴任していました。前月から重い病にかかり死をも覚悟していたことがうかがえ(巻十七・三九六二〜三九六六)、歌友であった大伴池主と、春を満喫することができない状況を嘆く和歌や漢詩を贈答しています(巻十七・三九六七〜三九七七)。

『続日本紀』によれ

やまと 万葉がたり

ば、同年1月には聖武天皇の体調不良により元日の儀式が取りやめとなっており、『東大寺要録』には、同じく3月に光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈願して新薬師寺を建立したとあります。越中にいた家持も、聖武天皇の病の報を聞くとともに、自らが任地で命を落とすかもしれない

不安を感じていたことが想像されます。その直後に詠まれたこの「恋の緒を述べたる作品は、都のわが家とそこに残してきた妻への思いを、長歌と短歌4首に収れんさせています。春花のうつろふ

の緒」を表現したかったのかもしれない。数をかぞえることを「よむ」という言い方は、神名のツクヨミノミコトなどにもみられます。現代語としてはあまり馴染みがありませんでしたが、奈良に着任してから「数をよむ」としばしば耳にするようになり、古語を身近に感じました。(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか)

【訳】春の花が散る時期まで逢えないので、月日を数えつつ妻は待っているだろうよ。